

巡礼：信仰の旅（特別聖年ローマ・イタリア巡礼とルルドへの旅）

—— 現元寺小路教会 ニコラウス・コンディ神父 ——

先月、イタリアとルルドへの巡礼に参加させてもらって、何よりも先ず神様に感謝します。そして共に巡礼した信者さん方に感謝したいと思います。この巡礼でまた新たな霊的な体験をしたと感じています。

十日間の巡礼を無事に終えたことは三位一体の神様のお恵みと、優しいマリア様が同伴してくれたお陰だと確信しています。この巡礼を振り返ってみて幾つかのことを学ぶことが出来た気がします。

＜先ず、出逢い＞一期一会という日本の諺があります。毎日出会う人々を大切にするというような意味合いがあります。この諺をまさしくこの巡礼に感じました。巡礼の皆が一人ひとりばらばらの独立した旅路を歩んでいるのではなく、お互いに助け、お互いに寄り添い、お互いに励まし、お互いに奉仕し、お互いに支え、支えられながら巡礼地へ向い、廻り、進んでいることに気付かされました。教会の在り方、信仰者の在り方も同じものでしょう。お互いを大切にすることによって教会、私達の人生が豊かになるでしょう。

＜次に、祈り＞旅行と巡礼は違います。旅行に祈りは必要ないかもしれませんが、巡礼に祈りは必ず必要です。祈りのない巡礼は「巡礼」とは言えないと思います。様々な困難な状況を共に乗り切るために神への深い祈り、お互いに信頼しあうのが巡礼の持つ特徴の一つです。この巡礼は祈りを徹底的にしたことが素晴らしかったです。朝の祈りと晩の祈りがあり、食前と食後の祈りがあります。毎日のようにミサとロザリオの祈りも唱えます。またルルドで、国と言語を越えて巡礼者の皆がロザリオの祈りを唱え、アヴェ・マリアの歌を歌いながらろうそく行列をしました。真にこのロザリオの祈りとろうそくの行列によって私達は共に信仰を育むような気がします。また皆が一人ひとり歩くのではなく、兄弟姉妹として皆共に手を繋いで歩いて、共に福音の喜びを照らすように、というメッセージも伝わってきました。祈りは信仰者の霊的な糧と言っても過言ではないと思います。

＜最後に、聖人たちとの触れ合い＞使徒信条の祈りの中で「聖徒との交わり」という文書があります。この「聖徒の交わり」の一つの意味は、生きている私達は亡くなった聖なる人と、イエス・キリストによって交流していることを信じるということです。聖人たち「聖ペトロとパウロ、ピオ神父、アシジのフランシスコ、聖クララ、聖ベルナデッタ」の生まれ育ち、教会、宣教活動場所を訪問したことによって、「聖徒との交わり」の信仰を身近に感じました。聖人たちがあらゆる場面で宣教活動し、素晴らしい信仰を証して下さったことを聖地を見て実感しました。聖人たちの信仰と情熱は生きている私たちの導きと力になるでしょう。